

シリーズ：その他

## 川や海の事故防ごう 子どもを守るライフジャケット

滝沢卓 2017年7月27日06時00分



川や海で子どもが溺れる事故を防ごうと、2組の水難事故の遺族がライフジャケットの重要性や、製品を選ぶときのポイントを伝える勉強会を開きました。

「身の回りでこれまで事故は起きていないから大丈夫」。そんな油断こそが危ない、と呼びかけています。

### ■「誰でも溺れることがある」

「出来る限りライフジャケットを着てください」。6月、大阪市内で開かれた一般向けの勉強会で、都内に住む吉川優子さん（46）は保育関係者など約25人を前に講演した。

吉川さんは2012年7月、5歳だった長男の慎之介君を川の事故で亡くした。当時通っていた愛媛県西条市の幼稚園が、山間部で開いたお泊まり保育の川

遊び中だった。現場は晴れていたが、上流で雨が降った影響などで急に水かさが増し、園児らが流された。園は子どもたちにライフジャケットを着せていなかったという。

慎之介君が亡くなった後も、河川での子どもの事故は繰り返されている。警察庁の統計によると、13～16年で計91人の子ども（中学生以下）が死亡・行方不明になった。

吉川さんはそうした事故の報道の中で「まさかこんなことが起きるなんて」「慣例行事でこれまで事故がなかったから大丈夫と思った」という声を見聞きするたびに、過去の事故の教訓が生かされていないと感じるという。「誰でも溺れることがあると知ってほしい」と話す。

この勉強会では、川の事故で夫（当時34）を亡くした大阪府に住む岡真裕美さん（37）も講演した。「助けに入った人も溺れるかもしれません」。12年4月、大阪府茨木市の川で、コンクリートブロックで遊んでいた小中学生3人が川に転落。助けようと飛び込んだ夫の隆司さんと、中学生1人が亡くなった。



岡さんは事故後、大阪大大学院に入学し、身近で起きる事故の予防について研究している。教授の紹介で、同じ水難事故の遺族として吉川さんと知り合い、今回の勉強会を企画した。

岡さんは「子どもの水遊びがだめとは言わない。ただ年齢によって、危険の理解度が異なる。安全に楽しむためにどうすべきなのかを大人が考えてほしい」と話す。吉川さんもこの思いに共感する。「のびのび遊ぶことと、無防備なチャレンジは違う。大人の見守りだけでなく、ライフジャケットの準備や正しい着用など、やるべきことはたくさんあります」

#### ■股下や肩ベルト 脱げにくさ重視して

子どもはどんなライフジャケットを着たらいいのだろう。

小型船舶用や川遊び用など、用途に応じて国や団体が安全基準や認定基準を設けている。水辺の安全教育をしている河川財団によると、子どもの体格は大人よりも凹凸が少なく、水中の流れなどでライフジャケットが脱げやすい点に注目すべきという。

子どもの野外体験講座を開き、吉川さんと岡さんの勉強会で講師を務めた「のあつく自然学校」（大阪府枚方市）の理事長、高井啓太郎さん（42）は「股下ベルトがあるものを選んでほしい」と話す。

浮いている子どものライフジャケットの肩部分を持ってボートなどへ引きあげる際、股下ベルトが無いとライフジャケットだけが体から抜けて、体が水中に取り残されてしまうおそれがあるという。

また、体の成長を見越して、大きめのサイズを買うのはやめたほうが良いという。製品によって、目安となる体重や胸囲、浮力があるためだ。脇や肩のベルトで体にフィットするように調節できるものがおすすめという。

河川財団によると、ライフジャケットはホームセンターやアウトドアショップなどで購入できる。価格は製品によって異なる。川の活動の指導者を育成するNPO法人川に学ぶ体験活動協議会が認定した製品（RAC川育ライフジャケット）は3千～4千円で購入できるものもある。

高井さんは最近、野外体験活動を実施するなかで、自然の川で遊んだ経験が少ない子が増えていると感じる。「水の速い流れや不規則に転がった石によって、水中で思うように動けないことに少しずつ慣れていくことが大事。そうしたことを安全に学ぶためにもライフジャケットは必要です」と話す。

<アピタル：ニュース・フォーカス・その他>

<http://www.asahi.com/apital/medicalnews/focus/>（滝沢卓）